

中川裕著

「アイヌ語をファーリードワークする」

安田千夏

最近、北海道で友人に会うとよくこの本の話になる。「こういふ本は、今までなかつた」それが、ほんどの人が口にする感想である。

アイヌ文化を広く一般のひとに紹介することを目的とした書籍は数多く出版されており、本書にもそういった役割があるといふことは著者の中川氏もあとがきのなかで述べおられるが、確かに本書には他に例をみない一面があると思う。それは何であるのか。

本書の第一章「アイヌ語を訪ねて」は、月刊『言語』93年1月号から半年間連載されたもので、この章で話は一度完結している。アイヌ語、アイヌ文化を学ぼうとする人間にとつて一番必要なものは何かという問い合わせる。社会言語学などによって話は展開してゆく。社会言語学などと違い、「アイヌ語の調査は、まずその人に会うことから始まり、信頼関係を確立することに続き、相手の資質を知り、それから初め

てその人に何を聞くかが決まっていくのである。」でもそれだけではない。まだ別の何かがあるのだと著者はいう。

本章には、とても哀切なくなりがある。故白沢なべ姫と著者の別れの一節である。なべ姫がお元気な頃、私は中川氏の勉強会でアイヌ語を勉強していた。氏はアイヌ語作文でどうしてもわからない部分があると、なべ姫に電話をかけたり、あるいは北海道に行つたときには直接なべ姫に聞いたりして、その都度的

確なアイヌ語を導きだしてくれた。われわれは、氏となべ姫の信頼関係を目のあたりにして、その恩恵にあずかつてアイヌ語の勉強をすることができた。その頃から私は、中川氏のアイヌ語に対する眞摯な姿勢とともに不思議に感じていたが、それが氏のどういった経験からくるのかということには考えが及んでいなかつた。「別の何か」のことなおさらこのくだりを読むと、中川氏のアイヌ語に対

念頭にはなかつた。ところがなべ姫は突然亡くなってしまった。そのとき私は、強い後悔の念と、何かを垣間見たような気持ちが交錯したような感覚を味わつた。それは今でもはつきりと思い出すごことができる。中川氏をはじめアイヌ語に携わってきた諸先輩がたは、何度も何度もこんな気持ちを味わつてきていたのではないかと想像してみた。でもそれは想像であり、古老の多くがすでにこの世を去つてから勉強を始めた人間の限界というしかない。中川氏のいう「別の何か」はもう少し深く、われわれの知らない世界からのメッセージを伝えているのかもしれない。そして、そうした限界を知る人間にこそ、本書は大きな意味をもつているのではないかと思われる所以である。

「別の何か」について著者はこのように説明している。「われわれがアイヌの古老たちから聞き出したいことがあるのと同時に、彼ら、彼らのほうにもわれわれに伝えたいことがあるのだということを意識」し、その気持ちにこたえようとするあたりから、それは調査という範疇ではなくなつてしまふ、と。

する姿勢、古老がたと信頼関係を保つてきた

いという気持ちの表れであつたろうか。

理由が実によくわかる。しかし残念なことに、これからアイヌ語の未来に関わっていく人間で、そのことを知る人間が増えるということは、ますあるまい。今からアイヌ語の勉強を始めようとする人間は、そうした古老がこの世に残していった気持ちを知るよすがもないのである。しかしそれはアイヌ語、アイヌ文化に携わるうえで最も大切なことであるはずである。そして何より、今まで表だって語られることがなかつたそのことが、本書では中川裕という人間を通してはつきりわかる。そういう意味で本書は「今までにない」のではないだろうか。

乏しい経験のなかでも、こんなカセットテープを聞いたことがある。ある伝承者が、調査者と向かいあってウエペケレ（昔話）を語っている。録音の途中で調査者が所用で席を立ち、部屋を出てしまふ。伝承者のおばあさんは誰もいない部屋でひとり、カセットデッキに向かってウエペケレを続ける。氣分を害して途中でやめるようなことは決してないのだった。それは「大事なこと」を伝えるべき相手は、目の前の調査者ではな

いという気持ちの表れであつたろうか。

また本書に表れている中川裕という研究者は、女の子がたくさん合宿に参加しているこ

とをいえば、この部分はもつと詳しく知りたかった。われわれが今ウエペケレを実際に聞いての若者と殴りあい寸前までいつてしまつたり、おばあさんとの別れの場面では心から涙を流したり、とても人間くさい。あたりまえの話だけれど「研究者たつて人間だ」ということがよくわかる、という点でも今までになといえるかもしれない。決してこれは撮影しているのではなく、うちあけ話的な部分は本書の大きな魅力である。Ⅲ-4「謝金」で

は、失敗談を交えて話が展開する点で非常に解りやすく、自分もまるでその場に居あわせでもしたかのように一緒に悩んでしまう。第二章では、「神」「あの世」「名前」という身近な言葉について、ひとりの日本人（和人）である著者の経験を通じて、アイヌの世界で

第一章と第四章の最後には、アイヌ語の現在と未来についての著者の見解がある。第一章は月刊『言語』の連載当時、すなわち93年に書かれ、第四章はその一年後に加筆されたものであり、同じ問題について書かれてはいるものの、後者ではアイヌ語復興の流れのなかにおいて、日本人（和人）がどうあるべきかについてが加筆されている。「アイヌ語を生きた言葉にしていくかどうかは、アイヌ人

はそれがわれわれの世界とどのように異なるかがわかるようになっている。おばあさんがたの生き生きした語りのなかに、今までどの書籍からも得られなかつたアイヌの世界に関する情報を読み取ることができる。

I-5「伝え残す者たちの思い」には、木

きを盛り立てていくのか、それとも阻害する

のかによって、アイヌ語の未来は大きく左右される。」そして地道な努力と時代の流れが作り上げてきた現状を「逆行させることだけはしてはならない」とある。これはアイヌ語の未来に携わる人間にとつての切実な願いでもある。

そしてアイヌ語復興の流れのなかにあって、これからは研究者だからといって、何か特別な立場を約束されるということもあるまい。本書I—6「受け継ごうとする人々のなかへ」には「学者といふ肩書きや、『学問』という言葉の権威で調査ができる時代はすでに終わっているのであり、研究者がその存在価値を社会から不斷に問われる時代にあるのである」とある。もしこの研究者がそれを自覚し、意識改革がなされるとしたら、アイヌの人々との間に今までになく画期的な関係が作られていくのではないか。その実現の一一番近くにいるのが中川氏であろうし、その周辺にいるわれわれは、本書を原点として、自分の存在意義を不斷に問い合わせながらそれぞれの仕事をやっていくことにならう。

本書は、アイヌ文化の入門書であると同時に、それ以外の意味も多く含まれているとい

うことを論じてきた。しかしそれにこだわることで、本書がアイヌ語、アイヌ文化に関わる特定の人間のために書かれたかのような印象を与えてしまったかもしれない。そうではなく、何より本書は誰にとっても気軽に読め

(やすだ・ちか／アイヌ民族博物館)

書評

野村純一著

『日本の世間話』

東京書籍 一九九五

山下欣一

本書は、日本における世間話の研究において、その視点と方法に關して先駆的位置を占めていると評することができよう。

現在、「学校の怪談」類の読み物が児童・生徒向けの絵本、単行本やそのシリーズとして刊行される盛況であり、遂には映画化され

るに至っている。メディアの波にのり、人々の好奇心を満足させ、さらには再生産への土壤を豊かに準備するという現代社会の定形的な過程をとつてはいるのは興味深いものがある。

本書は、このような現状において、多くの研究という立場からの取扱いについては、まだその緒についたばかりであるというのが率直な現状批評であると考えられる。

本書は、このようないい立場から問題提起を果敢に試みているのであり、このような意味で先駆的な書であるといえると思う。

本書は、次のような構成をとつていて

はじめに——世間話の世界

新

著者は、この本を読むすべての人に自らの生き方を提示するのであって、それをどう受け取るのかは読者の自由である。是非御一読をお勧めしたい。（大修館書店刊行）